アントニオ・グラムシ　人と思想

――現代社会理論とのかかわりで――

伊藤公雄

はじめに

国際グラムシ協会（International Gramsci Society）によれば、一九九〇年代の半ばのアメリカ合衆国で書かれた文系の修士論文で最も引用度の高い論者は、アントニオ・グラムシだったといわれる。実際、一九七〇年代以後、さまざまに展開されてきた社会理論・文化理論にグラムシの思想が大きな影響を与えてきたのは、これらの理論をめぐる議論に少しでもふれてきた人には明らかなことだろう。

たとえば、一九九七年に東京で開催された「グラムシ没後六〇周年記念国際シンポジウム」で、ジョゼフ・ブッティジージ（ノートルダム大学）は、その学術的影響の広がりについて次のように述べている。

グラムシ思想は、歴史、文学、コミュニケーション論、教育理論、人類学、社会学、経済学、政治学、神学、ジャーナリズム論、アフリカ研究、アメリカ研究、やや程度は落ちるが、哲学、法学、地理学、心理学、そして言語学などきわめて多くの分野に浸透している（ブッティジージ、2000: 66）。

実際、一九七〇年代以後、これらの研究諸分野において、グラムシの名を見いだすことはむずかしいことではない。しかし、特に一九八〇年代以後、日本の学術分野においては、政治学や経済学など一部の研究者をのぞいて、グラム

シへの言及は多くはないように思われる（一九六〇年前後から七〇年代初頭にかけて、世界に先駆けてグラムシの思想をもっとも積極的に翻訳紹介してきた社会のひとつが日本であったことを振り返ると、これは不思議なことだ）[1]。

本稿では、このグラムシの社会理論・文化理論をめぐって、彼独特の概念（歴史的ブロック、市民社会、ヘゲモニー、受動的革命、常識、知識人など）を軸に、グラムシのもつユニークな視座をめぐって、彼が生き戦った二〇世紀前期のイタリア社会と重ね合わせつつ論じてみたい。

一　アントニオ・グラムシの生涯

アントニオ・グラムシは、一八九一年一月二二日、アルバニア系移民の子孫としてサルデーニア島中部のギラルザ村で生まれた。病弱であった幼少時、（乳母が床に転落したことが原因ともいわれる）背中に瘤ができ成長がストップする。この病が原因で、成長後も身長は一五〇センチ以下だったという。一九一一年、奨学金を得て、トリノ大学文学部に入学。学生時代にイタリア社会党に入党したグラムシは、社会党トリノ支部の機関紙『グリード・デル・ポポロ（人民の叫び）』などの執筆・編集に力を発揮し、また、社会党青年部の機関誌『チッタ・フトゥーラ（未来都市）』や、社会党トリノ支部機関誌『オルディネ・ヌオーヴォ（新しい秩序）』などを創刊するなど、若き社会党員として活躍する。なかでも、一九二〇年のトリノにおける工場占拠闘争（工場評議会運動の展開）においては、その思想的支柱として活躍した。彼が書いた論文は、「イタリア社会党にかんしていえば、同党トリノ支部の名において、同党全国大会への提案として……『新しい秩序』誌に発表された党批判と実践的提起とが、本質的に正しいものであると、第三インターナショナル第二回大会は考える」（「共産主義インターナショナル第二回大会の基本的任務についてのテーゼ」）と、レーニンから高い評価をえる。

一九二一年、社会党から分派したイタリア共産党創設にかかわり、コミンテルンのイタリア代表としてモスクワに滞

在。この時期、イタリア滞在経験をもつロシア女性ジュリア（ユーリア）・シュフトと知り合い恋に落ち結婚している（デリオとジュリアーノという二人の男の子をもうけるが、次男とは死ぬまで会うことはできなかった）。

帰国後の一九二四年には国会議員に当選する。一九二六年一〇月、ソ連共産党内部での派閥闘争に関連し、抗争を批判する手紙を繰り返しモスクワに送るが、コミンテルンの幹部は、当時モスクワに滞在していたトリアッティとともに、ソ連共産党に手渡すことをためらい、一一月、イタリア共産党中央委員会もまたこの手紙の撤回を決定する（もし、ムッソリーニに逮捕されることがなければ、グラムシは、コミンテルン執行委員としてモスクワに行った段階でスターリンの手で粛清されていた可能性さえある）。党による彼の手紙の撤回の直後、議員不逮捕特権をもつにもかかわらず、グラムシはムッソリーニ政権により逮捕され、一九三四年まで流刑や監獄での生活を余儀なくされる。獄中の彼を支えたのは、大学時代からの友人で当時カリアリ大学教授だったピエロ・ズラッファと、ローマに滞在し続けた妻の姉のタティアーナだった。後にケンブリッジ大学で教鞭をとることになる経済学者ズラッファは、ミラノの書店に無制限の当座勘定を開設し、獄中でのグラムシの研究を支えたし、繰り返し面会してくれた義姉タティアーナは、彼の精神的支えとなった。

一九三四年、病気の悪化で身柄を病院に移したグラムシは、家族や友人に多数の手紙を書きつつ療養するが、病状は回復することなく、一九三七年四月二七日、脊椎カリエス、肺結核、喉頭炎、通風などの合併症に苦しみつつ、脳溢血に襲われ死亡した。

彼の死後、病床にいた義姉タティアーナは、ズラッファの協力のもとで、獄中で書きためた三三冊のノートを保管し、まずはズラッファの友人であるローマ商業銀行総裁ラッファエーロ・マッティオーリの手で同銀行の金庫に隠し、後にモスクワに移送した。その一部は、スペインに亡命中のパルミーロ・トリアッティに送付され、グラムシの獄中の著作の編集が、スペインで開始される。戦後、一九四七年には、獄中から家族や友人にあてた手紙を集めた『獄中からの手紙』が出版され、イタリアの三大文学賞のひとつであるヴィアレッジョ賞を受賞する。続いて、ノートの内容を含むグ

ラムシの著作集全六巻が一九四八年から五一年にかけて刊行されていく。ここで、全六巻のタイトルを記せば『史的唯物論とベネデット・クローチェの哲学』『知識人と文化の組織』『リソルジメント』『マキャヴェッリと近代国家についての覚え書き』『文学と国民生活』『過去と現在』である（日本でも『グラムシ著作集』として一九六〇年前後に翻訳刊行された）。一九五〇年代後半には、イギリスやフランスにおいても、グラムシの著作の一部が翻訳紹介され始める。しかし、この時期のグラムシの著作、なかでも『獄中ノート』と呼ばれることになる一連の文章は、執筆順等が未整理のまま刊行されていた。グラムシ思想の全体像がある程度まとまった形で明らかにされるのは、一九七五年、V・ジェッラターナの手により十分な校閲を経て刊行されて以後のことである

二　「絶対的歴史主義」――グラムシの視点・その一

すでに述べたように、一九七〇年代以後、社会科学や人文科学、特に文化を扱う諸領域においてグラムシの再評価にはめざましいものがあった。

それでは、何が彼の再評価を生み出したのだろうか。ひとつには、一九六〇年代後半に国際的に拡大したニューレフトの思想とのかかわりがあるだろう。

マルクス主義を軸にした社会主義思想におけるニューレフト運動の思想的「新しさ」とは何か。たとえば、ラディカルな社会学者として知られたアルヴィン・グールドナーは、「二つのマルクス主義」という小論で、一九六〇年代から七〇年代にかけて登場したマルクス主義を、従来の下部構造決定論にたつ「科学的マルクス主義」に対抗する「批判的マルクス主義」と名付け、新しいマルクス主義の登場として位置づけている（Gouldner, A., 1975）。

グールドナーが「批判的」と呼んだマルクス主義の新しい動きを、ここで簡単にまとめれば、次のように整理されるだろう。まず、官僚的な一党独裁を結果した「現実の社会主義」への批判という視点が存在するだろう。と同時に、資

本主義の全般的危機論や自動崩壊論に対して、現代資本主義におけるイデオロギー支配の構図を明らかにし、文化や意識の側面での変革の重要性を提起したことがあげられる。さらに、社会の対立の軸が単に資本家と労働者階級の階級対立を超えて、社会の多元的で複雑な領域（社会的マイノリティの権利や環境問題など）へと拡大していることへの指摘もまた、ニューレフトの「新しさ」であっただろう（伊藤、1998c: 819）。

こうしたニューレフトの思想を振り返るとき、獄中でグラムシが書き続けたノートは、すでに三〇年以上も前に、この新たな思想潮流をほとんど全面的に先取りしていたともいえるだろう。

マルクス主義思想の潮流におけるグラムシのユニークさは、何よりもまず、この思想潮流を縛り続けてきたいわゆる下部構造決定論から自由であったことだろう。そのことは、ロシア革命直後におこなわれたグラムシのロシア革命論においてすでに明らかであった。一九一八年、彼は「資本論に反する革命」と題した論文において、次のような考察を行っている。すなわち、資本主義の成熟をまって社会主義革命の端緒が切り開かれるという資本論に従うなら、ロシアのような後発国で革命が発生するはずはない。それなら、いったいどんな要因が、この革命を成功に導いたのか。これがグラムシの問いかけだった。経済的事実を越えた「社会的、集団的意志の発展」があったからこそ、この革命は成功した、というのが彼の考え方だった。ここには、彼の経済決定論的マルクス主義への冷徹な批判の視点とともに、後のヘゲモニー論へと結実する、上部構造の革命、主体の革命（もちろん、経済構造の重要性を無視したわけではないことは言うまでもないが）の視座がすでに先取りされているといえるだろう。

と同時に、この論文には、当時のそして今なお、多くのマルクス主義の思想潮流が依拠している「科学的」な歴史の一般法則的視座に対する、彼独自の「批判」が含まれてもいる。マルクス主義的な歴史の一般法則批判の代表例ともいえるカール・ポパーの「歴史（法則）主義 historicism」批判の先駆けともいえる視点が、二〇世紀の初頭のマルクス主義の陣営から公然と語られていることは、驚くべきことだ。

こうした、歴史の一般的な発展理論に対する否定の背景には、グラムシの師であり論敵でもあったベネデット・クローチェの存在がある。[2] たとえば、彼をイタリアの思想の流れのなかで論じたベッラミーは、グラムシの歴史的視座を「クローチェ風の歴史主義」と呼んでいる。

ベッラミーは、「進化論的マルクス主義に抗し、人間というものは自然過程の外部にあり、自らの意思に対応して自分自身を形成するというラブリオーラの批判を彼は繰り返し述べている」と指摘し、「クローチェに従い、彼は、自然科学の方法は、社会の研究に拡大すべきではないし、また、そうすることは不可能なことだと主張した」(Bellamy, 1987: 121-2) と述べている。

こうしたグラムシの歴史の法則主義的発展論に対する批判、すなわち彼の「歴史主義 storicismo＝historism」については、多くの論者が指摘してきた。実際、彼自身「絶対的歴史主義 storicismo assoluto」について、それをマルクス主義をふまえた社会変革の思想としての「実践の哲学」とのかかわりで、次のように述べている。

> すべての先行する歴史の結果であり総仕上げとしての実践の哲学。ヘーゲル主義批判から近代的観念論と実践の哲学とが生み出された。ヘーゲルの内在論的思想は、歴史主義へと転化したのだ。しかし、それは、実践の哲学としての絶対的歴史主義でなければならず、絶対的歴史主義いいかえれば絶対的な人間主義なのである (Q. 1826-27)。

もちろん、グラムシはクローチェを全面的に受容したわけではない。むしろ、獄中ノートにおいて、繰り返しクローチェ哲学批判を行っている。それは、クローチェが「政治的な穏健派の一形態にすぎない」(Q. 1325) という「政治的」理由からばかりではない。「実践の哲学がヘーゲル哲学を歴史主義の言語に翻訳したものであったように、クローチェ哲学が、実践の哲学の現実主義的な歴史主義を思弁的言語に再び訳し直したもの」であるからなのだ。つねにダイナミックな生成の視座から社会をみるべきだというクローチェの歴史主義的視点に対して、グラムシはそれを理論的には受容しつつも、その観念性をこう批判している。「彼は生成のうちに生成そのものを見ているのか、それとも『生成』

の概念を見ているのか」(Q. 1240) と。

グラムシの視座は、「概念」としての「生成」ではなく、明らかに歴史的現実としての「生成」を直視し、歴史に対して実践的に介入していこうという意思が見られる。偶然性や人間的諸力の介在を伴うプロセスとしての社会の展開への視線である。

実際、「グラムシの弟子」を自称したサイードは、彼のダイナミックな歴史・社会把握を次のように考察している。

「グラムシが理解する歴史的・社会的世界とは、空間的に把握されたものであり、たえまない変化、運動、変動による不安定性が強調されている」(サイード『故郷喪失についての省察2』みすず書房、2000＝2009: 201) と。

こうしたグラムシの歴史観は、彼独自のいくつかの概念とも深く関連している。具体的には、「歴史的ブロック blocco storico」概念は、その代表的な事例だろう。ジョルジュ・ソレルの言葉から生み出されたこの概念について、グラムシはこう書いている。

「構造に対する人間の積極的反応という必然的な関係」(Q. 1300) と。現実の歴史過程においては、構造（マルクス主義者のいう経済的下部構造）は「不動で絶対的な」(op. cit.) ものではありえない。歴史の具体的で現実的なプロセスは、人間の意思や主体と構造との相互関係のなかでしか把握しえないというのが、彼の視点なのだ。(3)

三　「市民社会」概念をめぐって——グラムシの視点・その二

グラムシの発想には、彼が吸収したさまざまな哲学や思想潮流が、彼なりの作法で新たに組み替えられつつ適用されている。すでにふれたクローチェ以外にも、すぐに思いつくだけでも、次のような学問分野や論者の名前があげられる。大学時代の研究テーマであった言語学の知識、マキャヴェッリ、ヴィーコ、デ・サンクティスに至るイタリアの思想潮流、マルクス、エンゲルス、ラディカルなサンディカリストとして知られるソレル、ロシア革命を成功させたレーニン

はもちろん、コミンテルン内部での論敵であり同志でもあったブハーリンやトロツキー、さらに、ダンテ、マンゾーニからピランデッロなどの文学者たち……。ジェッラターナの校閲による『獄中ノート』第四巻の最後につけられている引用文献の索引を見ると、彼が引用した人名は、左右二段組（各頁にそれぞれ九〇名程度の名前があげられている）で、四七頁、約四五〇〇名以上におよび、「著者名が判明している本とパンフレット」は左右二段組（一頁に二〇名から二五名程度の著者名がおさめられている）で四二頁、「同じく著者が判明している論文と書評」が三〇頁、「著者名不明の著述」が九頁と膨大な数にのぼる。

こうした概念の読み替えのなかでもよく知られているのが、グラムシ独自の市民社会論だろう。ヘーゲル＝マルクスの思想潮流において、市民社会と国家（共同性）の分離は、最大の課題であった。周知のように、両者にとって市民社会は「欲望の体系」として位置づけられてきた。個々の欲望に支配されることで共同性を喪失した人々に共同性を回復するという課題において、ヘーゲルは国家の側からの共同性の回復を、そして、ヘーゲルを転倒させたマルクスは、資本制によりコントロールされる市民社会の側からの（資本制の解体による）共同性の回復を目指したといっていいだろう。しかし、マルクス思想の流れのうちにあるはずのグラムシは、この国家と市民社会の分離という視座をまったく異なる視座から転用してみせる。(4)

背景にあるのは、ロシア革命の成功とその後のヨーロッパ革命の敗北をめぐる彼なりの総括だ。第一次大戦後、ロシアを突破口とするはずのヨーロッパ全土における社会主義革命（世界革命）は、結局失敗することになる。それなら、なぜ、ヨーロッパにおける革命は失敗したのか。この問題への対応が、彼の独自な思考を生み出すことになる。グラムシは、『獄中ノート』において、この問題を、「機動戦と陣地戦」という視点から解剖している。なぜ東方（ロシア）においては、機動戦により一挙に国家権力の奪取に成功したのに、西方（ヨーロッパ）においては機動戦が成功しなかったのか。その理由は、グラムシによれば、「東方では、国家がすべてであり、市民社会は原初的でゼラチン状であった。

西方では、国家と市民社会との間に適正な関係があり、国家がゆらぐとただちに市民社会の強固な構造が姿を現した」（Q7, 857）ためであった。つまり、国家が直接の支配の手段として立ち現れる市民社会の未成熟なロシアと比べて、ヨーロッパでは、国家の壁を破っても、その背後に、さまざまな市民社会の複雑な構造が存在するために、権力奪取だけでは政治革命は達成しにくいというのである。それゆえ、西方における革命は、機動戦だけでは達成できない。市民社会そのものの厚い構造を内部から変革していく、持続的な陣地戦が必要なのだ。

ここから、彼独自の「市民社会」概念とヘゲモニーの理論が生まれることになる。グラムシの「市民社会」概念が、ヘーゲル＝マルクスの国家と市民社会の分離の議論からヒントを得ていることは間違いない。しかし、彼の「市民社会」は、「欲望の体系」としての「市民社会」ではなく、むしろ西方における支配のメカニズムと結びつけられている。有名な「国家＝政治社会＋市民社会、つまり強制の鎧をつけたヘゲモニー」（Q6, 763）という視点である。

ヘゲモニーという言葉の語源は、「支配者」「主導者」を意味するhegemonというギリシア語だといわれる。現在では、グラムシと結び付けられて使用されるこの言葉だが、実は、グラムシは、この概念をレーニンから受け継ぎ、発展させたといった方がいいだろうと思う。よく知られているように、レーニンのヘゲモニー概念は、労農同盟におけるプロレタリアの主導性を表現するものであった。グラムシは、この言葉を、より一般化して、社会変革のプロセスにおいて、異なる利害集団、多様な集団に共通の意志を与え、それを水路づける知的・道徳的指導という観点から整理してみせたのである。

と同時に、グラムシは、この概念を、変革のプロセスにおける以上に、支配のプロセスの分析においても、鮮やかに適用してみせた（この概念の成功は、変革の概念としてではなく、支配をめぐる概念としての有効性の方が高かったのではないかとさえ思われる。このことについては、伊藤、1988など参照）。

つまり、司法や警察などによる強制のモメントとともに、教会、学校、労働組合等の諸装置を媒介にした被支配者側

の自発的な同意形成に着目して、彼は国家支配の構図を考察したのだ。

この定式から見ると、市民社会は明らかにヘゲモニーの領域として提示されているように見える。つまり、国家支配は、単に上からの強制のみではなく、下からの同意の動員を伴うという視点である。しかし、よく読むとグラムシの視点は、必ずしも一貫していない。『獄中ノート』においても、ヘゲモニーの定義を、単に同意のレベルに限定せず「強制と同意の組み合わせ」として表現している箇所があるからだ（ルークス、1989: 91-2）。

このグラムシのヘゲモニー概念を基礎に、アルチュセールは「国家のイデオロギー装置」論を展開した。しかし、このアルチュセールの議論を見ると、上からの民衆の巻き込みという位置づけがより鮮明になっているように見える。しかし、グラムシのヘゲモニー概念の有効性は、アルチュセール流の上からの巻き込みの側面の強調よりも、むしろ、支配する側と支配される側のズレや対立のなかでの調整や妥協を通じた同意形成という、より媒介的な視点にこそあるのではないかと思われる。実際、現在のグラムシ受容においても、この媒介的な視点にこそ注目が集まっているのだ。つまり、上からの巻き込みではなく、支配階級と被支配階級の対立・妥協・調停のなかで形成されるヘゲモニーという視点こそ、グラムシ風といっていいだろう。

四　「媒介」の思想――グラムシの視点・その三

前節で述べたように、グラムシとアルチュセールを比較するとき、両者の相違点として「媒介」の視座の強弱があるように思う。アルチュセールと比べて、明らかにグラムシには、「媒介」の視座が強調されているのだ。すべてを「過程」としてダイナミックに考察するからこそ、彼の「媒介」という観点は、より重要だ。そして、この「媒介」の視点は、グラムシの生み出した多くの独特な諸概念とも深く関わっている。

たとえば「有機的知識人 intellettuali organici」の概念である。グラムシは、聖職者や教師、弁護士、医者のような

「職業的知識人」を、「伝統的知識人 intellettuali tradizionali」と呼ぶ一方で、「基本的社会集団」に「経済の領域だけでなく、社会と政治の領域においても、同質性と固有の役割についての意識を付与」(Q. 1513) する機能をもった存在を「有機的知識人」と名付けたのである。

グラムシのこうした「有機的知識人」についての発想は、彼の目指したイタリアの社会変革のキーポイントでもある。グラムシは、後にふれるように一九八〇年代から九〇年代にかけてカルチュラル・スタディーズに大きな影響をおよぼすことになる。その理由のひとつは、二〇世紀の早い段階で、グラムシが大衆文化のもつ社会的機能についてさまざまな形で光を当てていたからである。特に、イタリアにおける「大衆文学」の不在をめぐる論考は、彼の「媒介」の重視とイタリアという社会を土台においた歴史的・文化的な社会変革の戦略をうかがわせるものである。

グラムシは、イタリア社会の変革問題を、民衆の側からの主体形成をいかに達成するかという観点からとらえられていた。だからこそ、民主の意識の覚醒のメディアとしての大衆文化、特に大衆文学に彼の目は向けられることになる。グラムシのイタリア大衆文化論は、イタリアには、自国の文化から生まれた大衆性をもった文学の不在という点から議論が進められる。

芸術文学の大衆性も、「大衆文学」の自家生産もイタリアには存在しない。それは「作家」と「大衆」では世界観が一致していないからである。大衆の感情は作家によって自己のものとしては生かされなかったし、作家が「国民教育」の機能をもつこともなかった。すなわち、大衆の感情を生かし、わがものとした上で、それを磨き上げる (elaborare) という問題が提起されなかったし、いまもなお提起されていないからである。

なぜ、どのような大衆文化の登場がイタリアに求められているのか。グラムシはこう考える。

なぜ、またどのように文学は大衆的となるか、という問題。『美』だけでは不十分である。ある特定の知的・道徳的内容が望まれるのである。そして、それは、特定の読者、すなわち、その歴史発展の一局面にある国民・民衆の

もっとも深部にある憧れの、磨かれ（elaborare）、完成された表現なのである（Q. 2113）。

支配的集団の利害や生活様式を反映した文化のもとで、いわば「借り物」の意識の下におかれてきた民衆＝従属諸階級は、自分たちの所属する集団について、その利害も未来についても十分に自己認識がなされていない。こうした民衆が自己認識をもち、自らの未来に向かって主体形成していくためには、未だ不定形な知的・道徳的内容を、より練り上げた形へと発展させなければならないのだ。

ここには、グラムシにおける「知の重層性」（伊藤、1981）とでも呼べるような人々の意識の構造をめぐる見立てが存在している。グラムシは、人間の意識の形態を、もっとも不定形な「フォルクローレ」から、一定安定した構造をもった「常識」、さらに、（常識のうちより本質的な要素である「良識」を媒介させつつ）、それを「elaborare 練り上げ」たものである「哲学」という三重の構図のなかで把握する。多くの場合、自らの哲学をもたず、常識のレベルに留まる民衆は、いわば「自分のものではない支配的理念を自分のものとして受容していく知の構造」（伊藤、op. cit.）のなかにおかれているのだ。ここに、持続的な下からの同意の動員＝組織化としてのヘゲモニーの構図、すなわち、従属する者たちの無意識的な同意形成が分析される。イーグルトンがヘゲモニー概念を独自に総括した次のような発言は、こうした従属諸階級の意識のありようをグラムシを継承しつつうまく整理しているだろう。

「特殊な主体が自分自身の最も深部の存在に同意する形をとってその命令に同意するように普遍的法則を無意識裡に自分のものとして取り込むあの過程」（イーグルトン「民族主義――皮肉と現実参加」、ディーン編『民族主義・植民地主義と文学』法政大学出版局、1996: 38）。付け加えれば、ここで語られたelaborare の概念（精緻化する、練り上げる、磨き上げる）こそ、サイードが強く惹き付けられたグラムシの概念のひとつであり、従属階級たるサバルタンが、自らの言葉を生み出すための「方法」でもあるのだ。

こうした視座から、グラムシは、マンゾーニをはじめとする「国民作家」を批判する。つまり、「マンゾーニにとっ

て民衆は『内面生活』をもたず、深い道徳的人格をもたない。彼らは『動物』なのだ。そして、マンゾーニは、彼らにとって『慈悲深い』。それはまさに、動物保護カトリック教会の慈悲深さなのだ」(Q. 896)。

グラムシが大衆文学を通して構想したものは、単なる「上から」の「外部注入」的な「国民教育」ではない。大衆文学を媒介した民衆の自発的な主体形成なのである。

たとえば、戦闘的クローチェ主義者の雑誌『ヴォーチェ』(そのメンバーの多くは、ファシズムに流れていった)の評価にもグラムシのこうした視座は明らかだ。

それ(ヴォーチェ)は、多くの人が自己自身を発見することを助け、内面の必要とまじめな表現の必要をいっそうかきたてたから、その運動から一人の大芸術家もうまれなかったとはいえ、その意味では実質的な働きをし、芸術の流れに刺激を与えたのである。

文学(文化)とふれる中で、自らを再発見し、読むという行為を通じて、作者と読者のコミュニケーションが生み出されることで、民衆が自らの集団的自覚を自己形成していくというプロセスへの視線、文学を媒介にした民衆の主体形成のプロセスをめぐるグラムシの視線が、ここではっきりとうかがえる。

五　受動的革命 revoluzione passiva ——グラムシの視点・その四

こうした「媒介」の視座は、グラムシの目指したイタリア社会の変革をめぐる理論と深くむすびついている。つまり、「民衆的・国民的」なイタリア構築の戦略である。そして、こうしたグラムシの思想の背景には、未完成の国民革命としてのイタリア統一革命=リソルジメントの歴史的総括が控えている。

十八世紀のナポリ革命の歴史的総括のなかでクオーコが命名した「受動的革命」という概念が、グラムシによって新たな息吹を与えられる。受動的革命とは何か。この奇妙とも思われる概念を、イタリア共産党中央委員会教育部編『グ

ラムシ入門』はきわめて巧みに整理している。

組織的動員や民衆の参加を通じてではなく、上からの指導を通じてなされる変革によって、受動的に遂行される革命を意味する。また、それは、大衆が主役でもなく、自立的主体として参加していないとはいえ、しかし受動的に巻き込まれている革命である（イタリア共産党中央委員会教育部編『グラムシ入門』）。

受動的革命概念は、しばしば「大衆が受動的に巻き込まれた革命」という視点が強調される形で整理されてきた。しかし、先にふれたような諸媒介装置を介した民衆の主体形成の重要性という視点からみるとき、むしろ、ここで示された定義の前半部分、すなわち「大衆の自立的主体的参画の欠如」という逆の視座から考える方が、グラムシの思想をよりうまく説明できるように思う。そして、この国民の主体形成の不在という観点は、リソルジメントからファシズムへの大きなイタリア社会の流れをめぐるグラムシの歴史を見る目を貫いている。

グラムシにとっての課題は、何よりも従属的状況におかれ自己意識をもたないまま支配的イデオロギーの下で生活して来たイタリア国民の主体的成熟であり、それを社会主義革命と連動させるということが、グラムシの戦略であったといえるだろう。

イタリアにおける大衆文学の不在を嘆いたグラムシにとって、「国民の知的成熟」を触発し、組織化する戦略・戦術こそが何よりも問われていたのである。

時に「ナショナリズム」と誤解されやすいグラムシの概念「国民的―民衆的 nazionale-popolare」の視座も、彼の受動的革命、すなわち民衆の主体形成と社会変革という観点からとらえ直すと、新たな視点が浮かび上がってくる。

グラムシのナショナリズムというとき、第一次世界大戦時のムッソリーニとグラムシのそっくり同じタイトルの論文のエピソードに注目する必要があるだろう。

当時、イタリア社会党のトップであったムッソリーニは、第一次大戦において中立を決め込むイタリア政府と、社会

党の「絶対中立」に対して、突然、方向転換し、「積極的・能動的中立」という論文を発表した。いわば、反戦から参戦路線への切り替えを暗示したのだ。

背景には、この時期のイタリアにおけるラディカルな知識人の参戦運動があった。ここには、未完成の国民革命＝リソルジメントを、戦争を通じた国民の主体形成と本格的な国民国家の完成へと転換させようというエネルギーが控えていた。ムッソリーニもまた、（十分な理念的かつ政治的判断があったとは思えない、どちらかといえば直感的なものであったと考えられるが）戦争参加による国民動員と国民の主体構築によるイタリアの変革の道を選択したといえる。

ムッソリーニのこの方向転換を暗示した論文発表に対して、グラムシもまた「積極的・能動的中立」というムッソリーニと同じタイトルの論文を発表している（このムッソリーニ評価ともうけとられかねない論文の執筆は、後にイタリア共産党結党前後でのグラムシの政治的立場に微妙な影響を与えることになる）。

ここには、（反戦／中立のイタリア社会党の立場を維持しつつ）次のようなグラムシの立場表明がなされている。

われわれイタリアの社会主義者には、次のような問題が提示されている。「イタリア人の」生活の現時点において、「イタリア」社会党（「プロレタリアート」一般や「社会主義」一般ではなくて）の機能とはどのようなものであるべきか。というのは、われわれが活動している社会党は、また「イタリア」のそれであるからだ。それはイタリア国民をインターナショナルに結び付ける任務を負った、社会主義インターナショナルのイタリア支部なのだ。この「焦眉の」そして「現実の」任務は、党に、「特別な」「国民的」性質を与える。この性質は、党に、イタリア人民の生活において、その特別な機能、その責任を負うことを要求するのである。(5)

「現実の」「焦眉の」「特別な」「国民的性格」という彼の言葉には、すでにふれたグラムシの歴史主義的立場の表明がみられる。

社会変革の基盤としての国民＝民衆という視座は、グラムシのフランス革命評価、特に（通常は否定的に語られる）

ジャコバン派の評価をめぐってもみられる。

ジャコバン派は行為の上で革命の唯一の政党であった。……彼らは特定の物質的な人間の要求だけでなく、存在する基本的集団に吸収されるはずであったあらゆる国民的集団の要求をも代表していた。……いいかえれば新しい国家に恒久的基盤を与え、緊密なフランスの近代的国民を創造した（Q. 2028）。

逆に、

（イタリアのリソルジメントにおいては）効力をもったジャコバン的勢力はつねに欠落していたし、また、それを構築することもできなかった。そして、他の諸国において、国民的・民衆的な意志を覚醒させ組織し、近代国家の土台を生み出したのは、まさにこのようなジャコバン的勢力なのである（op. cit.）。

彼にとって問題なのは、「民衆的」な（下からの）知的成熟と革命的な主体形成の場としての具体的な「イタリア」「国民」の形成であることは明らかだ。

ただし、彼の立場が、単なるナショナリズムとは異なるということには注意を払う必要があるだろう。また、観念的なコスモポリタニズムや（グラムシの論敵であると同時に、スターリンによる追放に際しては「同志」として徹底的に擁護にまわった）トロツキーの永続的世界革命論の立場でもない。あくまで、歴史的な段階としての国民的・民衆的な主体の問題として設定されているのだ（伊藤、1998a）。実際、グラムシは、自らの国民的・民衆的という立場が、単なるナショナリズムではないということは、かなりはっきり述べている。

すなわち国民的であるということは、ナショナリストたることとは違うのである（Q. 285）。

イタリアという空間的かつ文化的な具体性のなかから、多様な媒介諸装置を介して形成されていくイタリア民衆の自発的主体形成、さらにそこから国際的な普遍性へと開かれていくという方向が、彼の戦略だったといえるだろう。

六　グラムシと現代社会理論

以上のようなグラムシの視座が再び評価されるようになるのは、すでに述べたように一九六〇年代後半の若者の反乱とそれと連動する社会科学や文化理論の大きな変容の渦中においてであった。まさにジェッラターナ版が完成する一九七五年より少し前、一九七〇年代前半のことだった。

当初は、マルクス主義の革新の動きのなかで、イギリスやフランスでグラムシの受容が拡大していく。

なかでも、マルクス主義の再構築における国家論、権力論的なアプローチが一九七〇年を前後して次々と登場してくる。フランスでは、グラムシに触発されて書かれたアルチュセールの「国家のイデオロギー装置」論や、彼の教え子でもあるニコス・プーランツァス（グラムシの「ブロック」概念をヒントに、資本主義国家の権力構造が、異なる利害集団の調整によって構成されることを論じた「権力ブロック」概念を生み出した）やビュシ・グリュックスマンらの新たな国家論が、また、イギリスにおいても、プーランツァスと激しい論争を展開したラルフ・ミリバンド（この論争の概要についてはルークス、1989 など参照のこと）、さらにプーランツァスの影響の下で、彼が見落としていた文化領域への目配りをもったボブ・ジェソップなど、マルクス主義国家論、権力論の革新が、グラムシの影響の下で展開された。

ただし、これらの国家論からのアプローチの多くは、未だ古いマルクス主義国家論の枠組みから十分に抜け出していたとはいいがたい部分をもっていた。

こうした古い国家論の枠組みを超えて、政治学の分野では、グラムシのヘゲモニー論を、フーコー、ラカン、デリダといった現代思想を媒介しつつ新たに再編成し、ディスコース分析やアーティキュレーション articulation の概念などを駆使したらラクラウやムフの「ポスト・マルクス主義」と称されるラディカル・デモクラシー論なども一九八〇年代になると登場することになる。

グラムシの「弱点」ともいわれた経済学の分野にも一九七〇年を前後して、彼の影響下であらたな社会理論が生まれる。フランスにおけるいわゆる「レギュラシオン学派」である。この学派の代表的論者であるリピエッツは、こう書いている。「アルチュセールを経て、さらに矛盾の問題、蓄積体制や調整様式の問題、ヘゲモニーブロックの問題を経て、確かにわれわれはグラムシに戻って行った……」（リピエッツ、2002＝2002: 117）と。

グラムシは、獄中ノートで、アメリカ合衆国における資本主義の分析にかなりの紙数をさいている。いわゆる「アメリカニズムとフォーディズム」論である。そこには、なぜ資本主義は延命しえたのかというグラムシの問いが控えていた。大量生産の仕組みの構築による労働者の賃金の上昇と、その結果としての大量消費、消費の拡大によるさらなる生産の拡大という循環のなかで、アメリカにおいて資本主義は危機を克服したというグラムシの視点は、いわゆる「資本主義の全般的危機論」のような資本主義の自動崩壊論を超える観点を左派の経済学者に与えることになったのである。

アメリカニズムとフォーディズムの議論で興味深いのは、グラムシが、この様式が、労働者の心理や身体を変える力を及ぼしたと指摘している点だろう。

> アメリカにおける合理化は、労働類型と生産過程の新しい影響を与えるため、新しい人間類型を生み出すことの必要性を要請した。これまでのところ、この新しい人間類型を生み出す作業は始まったばかりであるし、いまだ牧歌的なものでしかない。しかし、それは高い賃金を通じてもたらされた、新しい産業構造への心理的・身体的な適応の局面である（Q. 2146）。

生産を軸に社会を考えて来た社会科学に、消費による人間類型の変容を示唆しただけでなく、それを通じた資本主義の延命の可能性をフォード主義（テイラーシステム）から洞察したこうしたグラムシの議論は、日本における現代資本主義分析にも大きな影響を与えた（平田、1993 など）。

レギュラシオン派は、こうしたグラムシのフォーディズム論に依拠しつつ、市場と生産の適合化やそれに対応した

「制度化された妥協」「調整」といった視点から二〇世紀の資本主義の動態を探り、その上で、こうしたフォード主義の危機とその後の転換を「ポストフォーディズム」という観点から整理していったのである。

一九七〇年代以後のグラムシの影響という点で最も注目すべきは、文化領域をめぐるものだっただろう。特に、イギリスでは、文化と政治というニューレフトが直面した課題との取組みのなかで、グラムシの再発見がなされていく。

後にカルチュラル・スタディーズの源流となるレイモンド・ウイリアムズが「マルクス主義文化理論における土台と上部構造」を一九七三年一一―一二月号の『ニューレフトレヴュー』誌に発表し、大きな反響をあびる。続いて、一九七六年から七七年にかけて、この雑誌の編集長であったペリー・アンダーソンによるグラムシのヘゲモニー論の非整合な部分の指摘とその現代的な適用を論じた「アントニオ・グラムシの二律背反」やグラムシを基礎にした西欧マルクス主義の新たな方向性を示した『西欧マルクス主義』などが刊行された。

マルクス主義の視点から文化、特にポピュラーカルチャーに視座をすえたこの潮流全体の動きを見ていくと、レギュラシオン派と同様、アルチュセールからグラムシへという歴史を逆流する流れが見て取れる。支配の理論としてのアルチュセールの「国家のイデオロギー装置」から、その源流としてのグラムシの再発見への移行とでもいえるような動きである。実際、一九八三年と一九九〇年の二回、イリノイ大で開催されたカルチュラル・スタディーズをめぐる大規模な国際会議での引用度数を見て行くと、一九八三年には最大数をほこったアルチュセールへの言及が九〇年には大幅減少傾向をみせるのに比べて、八三年では引用がそれほど多くはなかったグラムシへの言及数が急増しているのである（伊藤、1993）。

実際、この時期になると、グラムシの理論とフーコーの権力論、ブルデューの社会理論との相似性への指摘などもしばしば目にするようになる。

植民地支配の終焉後、旧植民地における特定の文化形態の支配の継続という視座を生み出したポストコロニアリズム

の議論にもグラムシの思想は大きな影響を与えている。この潮流の出発点ともいえるサイードの『オリエンタリズム』には、その発想の背後に以下のようなグラムシとの出会いがあったことが述べられている。

市民社会では、思想・制度・他人格の影響力は、支配を通してではなく、グラムシのいう合意を通して作用する。ある思想が他の思想よりも大きな影響力をもつのと同じ意味で、ある文化形態が他の文化形態に断然優越する。この文化的主導権の形態は、グラムシによって……ヘゲモニーとして認められたものに他ならない。オリエンタリズムに、これまで述べてきた持続性と力とを付与するのは、このヘゲモニーであり、正確に言えば、文化的ヘゲモニーの作用の結果なのである（サイード、1985＝1993: 29-30）。

また、ポストコロニアリズムと連動して生じたサバルタン（従属階級）研究においても、グラムシの思想は大きな意味をもっている。ポストコロニアリズムの代表的な論者であるインド出身の思想家、スピヴァックによる『サバルタンは語ることができるか』は、その典型例といえるだろう（スピヴァック、1988＝1998）。まさに「その生活様式、利害、成り立ち」が（実際は敵対するはずの）他の諸階級のヘゲモニーの下にあるがゆえに、サバルタンは、自己認識を形成しえず「階級」としてその姿を現すことができないのだ（Spivak, 1988: 276）。

グラムシはこう書いている。

サバルタン諸集団の歴史は、必然的に断片的であり、エピソード的である。たとえそれが一時的なものであっても、統一に向けての傾向があることは確かであるが、この傾向は支配諸集団の主導性によってつねに打ち砕かれ、したがってこの歴史の周期が、成功によって完結し、達成された場合にのみこの傾向は明らかになる。サバルタン諸集団は、反乱や蜂起の場合においてもなお常に支配的諸集団の主導性のもとにおかれている。つまり『恒久的』な勝利のみが、即時ではないが、その従属性を打破するのである。

大衆の能動的分子は実際的な活動を行なってはいるが――世界を変革するという意味では、この活動は世界を知る

とはいえ――自己の活動の明確な認識はもっていない（Q. 2283）。

こうした彼のサバルタンの概念を拡大してインドの農民階級分析に使用したのは、スピヴァックと同様インドに文化的基盤をおく研究者たちであった。なかでも政治史を専門とするラナジット・グハたちは、グラムシにならって農民のフォルクローレを、従属階級の世界観の表出としてとらえ、農民反乱の勝利の可能性を、支配的文化を握る権力ブロックの拒否から導き出そうとしたのである。その成果は、一九八〇年代初頭の一連の Subertern Studies のシリーズとして出版さていく。いわゆるサバルタン研究の登場である。

実は、このサバルタン概念にも、固定化されたマルクス主義の観念から自由な、グラムシの視点のユニークさがうかがえる。グラムシは、獄中ノートにおいて、ブルジョワジー対プロレタリアートという二大階級の闘争というマルクス主義のこれまでの観点から距離をとり、支配諸階級対従属諸階級という、重層的な階級対立の構図から支配と変革を語っている（この視座もまた、社会的対抗勢力がブルジョワジー対プロレタリアートという階級対立を超えて、女性、マイノリティ問題やエコロジー問題など多様な文脈で語られ始めた一九六〇年代後半以後のニューレフト運動や新しい社会運動論を予見していたともいえる）。

また、ジェンダー研究、特に男性性研究におけるグラムシ受容も一九八〇年代以後盛んになる。特に、グラムシのヘゲモニー論の影響の下で生み出された、R・コンネルのヘゲモニックなマスキュリニティーズという概念は、現在なお、男性学・男性性研究における最も使用頻度の高い概念といってもいいだろう（Connel, 1987 など）。

おわりに

それにしても一九三七年に死去した思想家の著作が、死後何十年も経過後、新たな思想の種として再生したことの背景にはどのような文脈が控えているのだろうか。

ひとつは、すでに述べたように、社会の複雑性の深化が、従来の単純な歴史の進歩史観や二大階級の対立といった「科学的」と称されるマルクス主義の視点からでは説明できなくなったという事情があるだろう。政治現象や社会現象を、文化的・空間的な視座をもって、具体的現実と向き合おうとするグラムシの絶対的歴史主義の観点は、その意味で、新たな社会理論・文化理論形成の契機となったといえるだろう。また、政治や社会を単純な対立と抗争によって展開されるものとしてではなく、多様な媒介装置を介在させた妥協や調整のプロセスのなかでとらえようとするグラムシの視座が、複雑な政治現象の分析にとって、有効性をもっていたことも明らかだ。

また、サバルタン論で示されたように、自らを表現する術を持たない従属階級の人々が、自己を再発見し主体形成を展開するプロセスは、一九七〇年前後に国際的に浮上したマイノリティをめぐる「政治」に重要な立脚点を与えたといえる。歴史の具体的な過程のなかに投げ込まれた民衆が、さまざまなメディアに媒介されつつ自己の存在を見つめ直し、自らの自覚されてこなかった潜在力を再発見し、それを発揮させていくという、いわゆるエンパワーメントの視点を彼が内包させていたということもできるだろう。

そして、最後に、グラムシの歴史観が、従来のマルクス主義が内包していた千年王国主義的な一挙的転換を展望するのではなく、一定の方向性をもちつつも完成することのない実践の永続としての社会変革という観点をもっていたことも、ポスト・マルクス主義の政治が語られる時代において重要性をもっていたと思う。

グラムシの冷静な現実主義は、同時代人であるベンヤミン（それが、読者に強い共感を含んだ反応を生み出すのは事実だが）などと比べて、一挙的な千年王国的「革命」の成就を夢想することがほとんどないのである。「終わり」のない永続的な歴史的過程のなかでの民衆の主体的かつ知的な成熟を、エリートの視座とは異なる観点から考察しようとしたグラムシの視座が、二〇世紀の終わりの時代に大きな力を発揮した理由は、こんなところにも求められるのではないだろうか。

注

（1） イタリアでは、戦後いち早く著作集（当時は、二九冊あった『獄中ノート』は、それぞれが書かれた年代も順番も確定されないままだったけれど）が刊行されている。西欧社会でグラムシの再発見が本格的に行われたのは、一九七〇年代後半から八〇年代にかけてのことだったと思われる（ちなみに、日本は、他のどの国よりも早い一九六〇年前後に、グラムシの主な著作の翻訳・出版が行われていた希有な社会だったことも記憶しておいてもいいだろう）。いわゆる西欧マルクス主義の広がりのなかで、彼の独自の国家論に注目が集まったのである。

（2） グラムシのクローチェからの影響は、歴史をプロセスとしてとらえることとともに、クローチェ哲学の反実証主義的立場においても強力に作用している。そのことは、グラムシの社会学批判のうちにもはっきりと見いだすことができる。グラムシは、十九世紀から発展したイタリア社会学、なかでもイタリア社会党に大きな影響を与えたイタリアの犯罪社会学研究に対して、獄中ノートで繰り返し批判を行っている。

（3） ただし、こうした人間の主体性の強調は、「主体の革命家」、「上部構造の理論家」という評価の一方で、彼の経済的視座の不十分性という指摘を生んでいるのも事実なのだが。

（4） グラムシの市民社会論がヘーゲル＝マルクスの「読み替え」のなかで独自の概念として成立したプロセスについては、ボッビオの議論がよく知られている。Bobbio, 1968 など。

（5） Gramsci, A., “Neutralità attiva ed operante”, in《Il grido del popolo》, 3, ottobre, 1914.

主な参考文献

グラムシの『獄中ノート』からの引用は、Q に続けて通しの頁数で示した。

Anderson, P., 1976, Consideration on Western Marxism, New Left Books.（中野実訳『西欧マルクス主義』新評論、一九七九年）

———, 1976-77, “The Antinomies of Antonio Gramsci” New Left Review, no. 100, November 1976-January 1977.

Bellamy, R., 1987, Modern Italian Theory, Polity Press.

Bobbio, N., 1968, “Gramsci e il concetto di società civile”, in Gramsci e la culutura contemporanea, Atti del Convengo

Internazionale di Studi Gramsciana; Einaudi.
ブッテージ、ジョセフ、2000「北アメリカにおけるグラムシ」、グラムシ没後六〇周年記念国際シンポ編『グラムシは世界でどう読まれているか』社会評論社。
Connel, R., 1987, Gender and Power, Polity Press.（森重雄他訳『ジェンダーと権力』三交社、一九九三年）
Day, R. J. F., 2005, Gramsci is Dead-Anarchist Current in the Newest Social Movement, BTL.
Fiori, G., 1971, Vita di Antonio Gramsci, Laterza.（藤沢道郎訳『グラムシの生涯』平凡社、一九七二年）
藤澤道郎、1979『アントニオ・グラムシ』すくらむ社。
Gouldner, A., 1975, For Sociology, Penguin Books.
Gramsci, A., 1975, Quaderni del Carcere 1-4（a cura di V.Gerratana）Einaudi.
Guha, R. et all（eds.）, 1982, Subertern Studies, I, II, III, Oxford UP.（竹中千春訳『サバルタンの歴史』岩波書店、一九九八年）
平田清明、1993「グラムシとレギュラシオンアプローチ」、片桐・黒沢編『グラムシと現代世界』社会評論社。
Holib, R., 1992, Antonio Gramsci — Beyond Marxism and Postmodernism, Routledge.
伊藤公雄、1981「アントニオ・グラムシの知識人論をめぐって——《常識 senso comune》概念との関連で」、『イタリア学会誌』第三〇号。
——、1985「『開かれた』イデオロギー装置——メディアとしての少年軍事愛国小説」、京都大学新聞社編『口笛と軍歌』社会評論社。
——、1988「グラムシ文化支配論と現代」、伊藤・片桐・黒沢・西村編『グラムシと現代』お茶の水書房。
——、1989「『支配』の文化・歴史社会学に向けて——C・ギンズブルグからA・グラムシへ」、いいだ・片桐・伊藤編『生きているグラムシ』社会評論社。
——、1992「リソルジメント・大衆文学・ファシズム」、グラムシ生誕一〇一周年記念『グラムシの思想空間』社会評論社。
——、1993a「グラムシと文化支配の現在」、片桐・黒沢編『グラムシと現代世界』、社会評論社。
——、1993b「グラムシなんて知らないよ」、『情況』一九九三年一一月号、情況出版会。
——、1997a「グラムシとカルチュラル・スタディーズ」、『月刊フォーラム』一九九七年一一月号、社会評論社。

――、1997b「モンテ・アミアータのキリスト――一九世紀イタリアにおける千年王国運動」、日伊協会『日伊文化研究』。
――、1998a「グラムシと近代国民国家――国民・民族意識の両義性をめぐって」、情況出版社編『ナショナリズムを読む』情況出版社。
――、1998b「権力と対抗権力――〈ゲモニー論の射程」、井上他編『岩波現代社会学講座16　権力と支配の社会学』岩波書店。
――、1998c「新左翼」、廣松・子安・三島・宮本・佐々木・野家・末木編『岩波哲学思想事典』、岩波書店。
――、2001「カルチュラル・スタディーズが問いかけるもの」、数理社会学会『理論と方法』第一五号。
――、2005「解釈と実践」、盛山他編『〈社会〉への知／現代社会学の理論と方法（下）』勁草書房。
――、2006「『過程』と『媒介』の思想――アントニオ・グラムシの視座」、大橋良介・高橋三郎・高橋由典編『学問の小径』世界思想社。
――、2011「〈ゲモニー――グラムシ『獄中ノート』」、伊藤・井上編『社会学ベーシックス第九巻　政治・権力・公共性』世界思想社。
――、2011「書評『クローチェ　1866-1952』」、社会思想史学会『社会思想史研究』第三五号、pp. 206-210.
Jones, S., 2006, Antonio Gramsci, Routledge.
片桐薫、1991『グラムシ』リブロポート。
Lipietz, A., 2002, La Théorie social de la régulation.（若森章孝・若森文子訳『レギュラシオンの社会理論』青木書店、二〇〇二年）
松田博（編）、1988『グラムシを読む――現代社会への接近』法律文化社。
Said, E., 1978, Orientalism, Routledge.（今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社ライブラリー、一九九三年）
Spivak, G. C., 1988, "Can the Subaltern Speak?," C. Nelson and L. Grossberg (eds.), Marxism and the Interpretation of Culture, Macmillan.（上村忠男訳『サバルタンは語ることができるか』みすず書房、一九九八年）
Williams, R., 1973, "Base and Superstructure in Marxist Cultural Theory," New Left Review, November-December 1973.（「マルクス主義文化理論における土台と上部構造」川端康雄他訳、レイモンド・ウイリアムズ『共通文化に向けて　文化研究Ⅰ』みすず書房、二〇一三年に所収）

（筆者　いとう・きみお　京都大学大学院文学研究科教授／社会学）

Antonio Gramsci
His thought and contemporary social theiries

by
Kimio ITO
Professor of Sociology
Graduate School of Letters
Kyoto University

Antonio Gramsci (1891-1937) is one of the most influential thinkers in the 20th century but his life and thoughts only started to received global attentions only in 1970s. After his main work "Prison Notebook (Quaderni del Carcere)" was published in 1975 with Valentino Gerratana's critical arrangement, Gramscian studies took a new turn and now his name carries relevance in many academic fields: history, literature, communication studies, pedagogy, cultural anthropology, sociology, economics, political sciences, theology, journalism studies, philosophy, geography and linguistics.

In this paper, I argue about his social and cultural theories, focusing on his original key concepts and ideas as follows: absolute historicism, civil society, organic intellectuals, common sense, passive revolution, Jacobinism, and national-popular. I will continue by discussing the impact of Gramscian thought on contemporary social and cultural theories including Neo-Marxian state theories, regulation approach, cultural studies, post-colonial studies, subaltern studies and gender studies.

In conclusion, I approach to his unique perspectives on history and society, referring to his absolute historicism and endless-continuous social change strategy.